

Jacques Lison:

*l'Esprit répandu, la pneumatologie de Grégoire Palamas*

Paris, CERF, 1994, pp. xii+305.

大 森 正 樹

パラマスの評価をめぐることはカトリック神学者からは、例えば、M. ジュジーや B. シュルツェ、J. ナダルなどの痛烈な批判がある一方で、D. コフィー、J. クールマン、A. ド・アルーなどパラマスに好意的な神学者がいる。本書の著者リソンは後者に属する神学者の一人である。一人の思想家の欠陥部分にあるイデオロギーから論うのではなく、その人間の残した文書を虚心坦懐に読み解き、時代背景を考慮に入れて、総合的に判断することは現代の文献学の基本路線であろう。著者もそうした流れのうちにある、カナダのドミニコ会士である。本書はルーヴァン・ラ・ヌーヴ大学に提出した学位論文が基本となっている。

西方教会に比べ東方教会では聖霊の比重が大きいと言われる。西方と東方が分裂する一つのきっかけは「フィリオクエ」の問題であったことは周知のことである。そうしたことを念頭において、ヘシカズムの博士パラマスが聖霊に関していかような考えをもっていたかを探り、そしてその考えを視野に収めることによって、より広いエキュメニカルな考察が可能になるかを示したのが本書である。

本書は六章から成っている。著者はこれまでのパラマス論争は行き詰っていると判断し、それに対して聖霊論的総合を加えることでこの行き詰まりを打破しようと目論む。それは聖霊論がパラマスの全著作の中に浸透しているからである（序文）。

第一章は「聖霊のオイコノミア」と題する。キリストの受肉、洗礼、タボル山上での変容、聖霊降臨といった重要な救いの出来事には必ず聖霊が係るのであるが、パラマスによると(1)受肉と変容の時に父と聖霊は子を人間に送り、(2)キリストの洗礼の時に父は子の上に聖霊を送り、(3)聖霊降臨の時に父と子は聖霊を人間に送る、と言う。

このように聖霊がいかなる時も大きな働きをなすのは、神の救いの計画（オイコノミア）によれば、神は人間が聖霊の恵みにより神化することを望んでいるからである。人間の神化は、人間が創造されたこと、そして不断に再創造されていくこと目標なのである。従って聖霊の業は救済のあらゆる局面をめぐっており、更にキリストの到来をも準備するものである。これが三一論的図式である。また聖霊降臨は聖霊が被造界へ浸透していくべき重要なカイロスなのであるが、これは救いのオイコノミアの最終段階である。父と子が聖霊を送るが、その際、父の優位性は損なわれてはいない。

第二章は「聖霊の賜物」である。聖霊は人間に最後に送られたものであるが、ここにパラマスの新しい考えが見られる。つまり聖霊は子の上にとどまっているものだが、それは子が父に送り返す父のエロスなのである。これは彼の後年（1349年から1350年の間）の論であるが、これだけを読むと多くの人はそこにアウグスティヌスの影響を見て取ろうとする誘惑にかられるが、著者はシンケヴィツとともにそれを退ける。つまりパラマスは聖霊を父と子の間の愛という関係において考えていない。聖霊はあらゆる点において神の善、そして父と子と、ヒュポスタシスを除いて同一であり、聖霊は自らの完全なヒュポスタシスを有しているからである。従って、神学という地平では聖霊の存在はもっぱら父に依るが、オイコノミアの地平においては、子と聖霊は父とともに創造と人間神化の源となるのである。聖霊の役割はだからこの世での人間の新しい原理となることであり、一切の被造物を神へと戻すことなのである。また問題的な神のエネルゲイアについても著者は定式通り、エネルゲイアはウーシアとは不可分であり、エネルゲイアは人が神と交わりをもちうるものであると述べ、神の三位において、エネルゲイアはペリコレシス（相互内在性）により互いに浸透し、被造物に対しては聖霊において子を介して伝えられるのであると言う。たまたし聖霊のウーシアもヒュポスタシスも人に完全に示されえないとしたら、聖霊の賜物などと言えるのかということに対しては、その賜物はあくまでエネルゲイアであって、父・子・聖霊に共通のエネルゲイアは、聖霊が人に働くことによってその固有性を保つ、とパラマスに代って語っている。

第三章は「パラマス論争への視点」である。例えば聖霊のエネルゲイアが非創造であって、しかも神のウーシアとは区別されるという命題は教父たちを援用する必要があるが、それは著者の意図を越えているとして、教父からの引用を限定する。そして言うには、パラマスの思考は一貫性があり、しかもそれは閉じられた体系ではない。

彼は東方の伝統の本質的価値を自らの理性で弁護したのであり、その限り非妥協的であるが、しかし対話への用意はある。ある条件のもとでなら創造された恩恵の可能性も認めているくらいだからである。これは「フィリオクェ」問題よりも東方教会にとり微妙な問題なのである。パラマスによると恩恵は非創造であって、それは神化であり、聖霊は直接に神の生命を信ずる者の心に伝達する。パラマスはエネルゲイアを *quasi-accident* (コフィーの言葉) として取り扱いながら、神の「外への」働きの偶然性を考慮する。しかし彼にとってはそれはあくまで非創造である。創造された恩恵の可能性は霊的賜物の方にある。それは「無から創造された」果ではなく、被造物の回復であって、非創造の恩恵である聖霊のエネルゲイアの活動があって始めて可能なものである。はじめに非創造の恩恵ありき、なのである。

第四章は「神への与り」を述べる。神のウーシアには人間は絶対に与りえないから、与るとすれば神のエネルゲイアにであるわけだが、それが二神論とか多神論あるいは汎神論であるという非難を浴び、大論争になった。こうした問題に対しパラマスは「与り」は神の恵み、聖霊の賜物といったエネルゲイアに与るが、それはいわば間接的方法で実現する。このエネルゲイアへの与りは現実的なものであり、神への与りである。しかし、神のエネルゲイアに与る聖人は完全に、全的な仕方によるのかと言うとそうではなく、不完全で、部分的である。つまりどれ程現実的なものであっても、完全には与りえない。このことによって汎神論は回避される。そして神のエネルゲイアはそれに相応しい人のヒュポスタシス夫々に結びつくが、決して神性が人性のうちに解消し尽されることはない。しかも人の神のエネルゲイアへの与りについても一種のヒエラルキーがあり、その人間の霊的境地に応じて増大してゆく。しかし聖霊のエネルゲイアは神の三つのヒュポスタシスに共通の生命に部分的には参与させるので、「与り」は神の全体に部分的な仕方を実現している。

第五章はもう少し具体的な地平に眼を向け、「信仰生活においてキリストの光に近づく」問題を取り扱う。受肉は人祖による原罪以来の不幸を祝福に変えるものであり、キリストは人間の本性を再生させるのみならず、人間のヒュポスタシスをも再生する。この再生は御言葉が洗礼の水の中に注ぎこんだ聖霊の恵みにより生み出される。そして信徒は聖体拝領により聖霊に結びつけられる。聖霊降臨以来キリストの再臨までのオイコノミアは受肉の効果が多数に及び、それぞれに内面化しているという性格をもつ。聖霊は各信徒の心の中に現存し、留まり、人を助け、そして人の協力を得て、人

を神化させる。ところがパラマスにあっては、聖霊を教会論という立場では論じることが少なく、個人と神との関係を説くことが多いと著者は言う。つまり教会は各人に秘蹟を授与するという働きにおいて重要であるが、パラマスは神と人の関係を極めてパーソナルに捉えている。それは東方の伝統でもある。

第六章は「霊による神化の結果」である。一般にパラマスには神の計画についての体系が稀薄であると言われるが、パラマスの認識、神との一致、照明等々のテーマを考える時には救いの神秘の核心に触れていることを著者は明示する。パラマスにとり真の認識は理性作用の果てにあるのではなく、聖霊のエネルギーの体験にある。つまり聖霊の輝きは照明であると同時に認識であり、人間の体をも霊化する。体は魂に結びついた悪しきものではなく、体は体でありながら、光に対し透明となり、変容してゆく。それが聖霊の賜物である。つまり聖霊の賜物は本質的に光であって、それは被造物に与えられ、また見られる。そして最後に人と神との関係が「垂直関係」であることに言及する。ビザンツ教会では恩恵を水平的には考えず、むしろ人が神へと上昇していくことを目指す。教会は信徒を世界の些細な渦巻きの外に連れ出し、神化の道に据え、その頂上にキリストを置く。それはこの世から引き退くことだが、それはこの世やこの世界の時間を軽蔑することではなく、神の愛のうちにそれらを集中させ、来世をこの世にまで引き込むのである。この世界の空間もその隅々まで無限が浸透し、人間存在に無限を引き受けさせる。即ち今ここでの神化の可能性を説く。パラマスの聖霊論は空間—時間の核の中で平衡を保っていると言え、聖霊そのものは教会をこの世での聖人の集会に変容させるのである。

著者によればパラマスは体系というものを造ることなく論争の中に入っていたが、それは東方の霊性の伝統という面を捉えないと理解できないこと、またパラマスには神学とオイコノミア、そしてケリグマの神学と体系的神学の間に裂け目があると言われ、ポドスカルスキイなどは神のエネルギーを十分に救済的文脈の中に位置づけていないと言うが、それは余りにも西欧的視点によっていると批判。また違う伝統の中にあるパラマスにも西方と同じ信仰の表明があることは、キリスト教の豊かさを示すものであり、聖霊のみが我々を完全な真理へ導いてくれるのであり、聖霊への意識の薄い西欧はパラマス研究によってそれへと目覚めていかねばならないことをもって結論としている。こうした視点は神学の領域から離れて、東と西の思想の結節点への思考を促すもので、その意味で意義ある研究であると言える。